

科目区分 教科専門

授業科目名 倫理学 I (1 回生対象：学校教育 12 名、人間社会デザインコース 9 名)

「共 common」の領域の構築に向けて

社会科教育講座 倫理学・哲学 寿 卓三

I 授業評価 (5 段階：a 良い～e 悪い)

(1) 授業アンケートから

問 1 この授業に積極的に参加したか。

a 5/5 b 7/4 c 0/0 d 0/0 e 0/0

問 2 学びの意欲を喚起したか。

a 6/6 b 4/2 c 2/1 d 0/0 e 0/0

問 3 この講義のテーマ・目的は明確か。

a 7/3 b 3/4 c 2/1 d 0/0 e 0/0

問 4 学生同士の話し合いの意義

a 10/6 b 2/3 c 0/0 d 0/0 e 0/0

問 5 学生の発言への寿の対応

a 5/2 b 5/5 c 2/2 d 0/0 e 0/0

問 6 3つの教材選択の妥当性

a 7/4 b 5/4 c 0/1 d 0/0 e 0/0

問 7 授業のレベル

a 2/0 b 5/5 c 5/4 d 0/0 e 0/0

問 8 この講義で得るものはあったか。

a 6/4 b 5/4 c 1/1 d 0/0 e 0/0

問 9 この講義のおすすめ度

a 5/4 b 5/3 c 2/2 d 0/0 e 0/0

問 10 良かった点、改善すべき点

〈良かった点〉

- ・ 個々の意見が聞ける話し合いの時間
- ・ 講義の感想がレジュメとして載ることで答えにつながることを発見できた点
- ・ 多くの人とディスカッションができ、コミュニケーション力を培うことができたとともに心の引き出しを増やすことができたと思う。

〈改善すべき点〉

- ・ 自分たちの班で話す時間が長くて他の班の意見を聞く時間や教授のお話を聞く時間が限られた点。(長所の裏面)
- ・ 話し合うことが明確ではなく何を話し合えばよいのか分からないことがあった。
- ・ 時間をハッキリときめて時間がきたら、パチッと討論をやめ、板書ができるようにすればよかった。
- ・ グループでの話し合いであるが、積極的に発言をする人とそうでない人とで壁ができてしまったことがあり、講義の理解度はグルー

プのメンバーに左右されてしまうと感じた。逆に、そこから成長できるとも考えられる。

(2) レポートの抜粋

レポートは各自で自由にテーマを設定して論述するという形式であり、それぞれが固有な視点から論じているが、少なからぬ学生の記述に「学びの共同体」の成立をうかがわせる論述が見られると考えている。その一部を抜粋してあげておきたい。

① 私は倫理学の授業で取り扱った「夕焼け」(吉野弘)「ある男子生徒の日記」(アシスト：高橋大助)「100 万回生きたねこ」(佐野洋子)という 3 つの題材から授業を通して様々なことを学ぶことが出来た。そして、いろいろな事柄について自ら考えるようになった。また班での活動を通してたくさんの疑問をともに議論し話し合った。ここでは話し合った中で言葉で表現することが難しかった疑問にあえて論述することに挑戦し、自らの考えをより確かなものへと導きたいと思う。そのようなことから今回、私は「現代社会について」ということと「愛とは何なのか」という事柄について論述する。

② 倫理学の講義を通して、生きることは何か、愛とは何か、自分らしく生きるとは、など様々なことを考えることができた。さて、私はこのレポートの中で、「幸福に生きることはどういう生き方か」について論じていきたい。その前になぜこのテーマにしたかを述べておく必要があるだろう。倫理学の講義で主に取り扱った 3 作品にそれぞれ自分なりにテーマをつけてみた。『夕焼け』は「やさしさ」と「現代社会を生き抜く力」、『ある男子生徒の日記』は「社会に縛られず自分らしく生きる力」、『100 万回生きたねこ』は「愛と生のつながり」である。この自分が考えたテーマの中で共通する点は、「生きること」にあると考えられる。そこで「生きることは何か」について考えようと思ったが、あまり

にも漠然としていると感じた。そこで、最後の発展的問いの夏目漱石『明暗』で「不幸」という言葉を思い出し、では「幸福」とは何かを考えた。「不幸」という言葉がとても印象に残ったと同時にそれまでの自分の考えをここからうまくまとめられる予感がしたからである。

③ 私は倫理学でたくさんのことを学んだ。特に私は“かけがえのなさ”について深く考えた。本レポートでは、学んだことを発展させ、現代社会が抱える『ペットロス』について考えていきたい。日本におけるペットの飼育率は高く、特に50代において最も高くなる。その理由について、ペットの飼育が子育てに似ており、50代で子育てがほぼ終了した後に、余勢を駆けて子育て本능がペットに向かうのではないかと考える人もいる。自らの子どものように、またはそれ以上にペットを可愛がる人が多く、そのペットが亡くなったときの悲しみは計り知れない。最近では、ペットを火葬し、ペット霊園に託すか、親族の墓の近くにペットの墓石を設ける人も少なくない。ペットを愛することはとてもいいことだが、ペットロスになり何も手につかないほど落ち込み、鬱状態になる飼い主が多くいることは危険だと思う。ここでは、『100万回いきたねこ』を学んだ時に特に考えた、“かけがえのなさ”について考えたい。

II 講義の意図

数年来指摘したように、我々の目の前にいる学生の読解力、聴く力、発話能力は、近年すでに危険水域を越えて低下していると考ええる。人文科学・社会科学に定位しつつ学校教育に関与しようとする者にとって、読解力、聴く力、発話能力の不足はほとんど致命傷と言える。

そのことは教育実習の場においても顕著であろう。我々の多くは、「双方向性」の学びの重要性、当事者意識の涵養の重要性を講義で力説しているであろう。しかし、我々自身が言うところの「双方向性」の授業を展開しているだろうか。学生同士に議論させることが、双方向性、当事者意識の涵養と勘違いしているのではなかろうか。

私の歪んだ眼差しには、わが教育学部の教育の現状は、まことにゆゆしき事態と映っている。そこで、学生の日常に転がっているような何気

ない事象を基に社会科教育の目標である「公民的資質」ということについて学生自身の問題として捉え返す契機とすべく努めているつもりだが、「大山鳴動してネズミ一匹も出ず!」という惨状である。

III 講義の素材・構成

学生のレポートにもあったように、「夕焼け」(吉野弘)、「ある男子生徒の日記」(アシスト:高橋大助)、「100万回生きたねこ」(佐野洋子)という3つの素材について、私が基本問題を提起し、そこから学生たちの議論に即して展開するというのが、この講義の基本構造である。「ありがとう」という人と人をつなぐことばが、なぜ人を追い込むことになったのか。中学一年生の女子生徒が親殺しという創作日記を書くという現実から何を読み取るのか。そして、100万回の生き返ったねこが、最後に死んで生き返らなくなったことになぜ私たちは満足感を得るのか。別の言い方をすれば、「死ねて良かったね」という「いじめ」の極限の表現に我々はなぜ充足感をもつのか。こういったテーマを扱った。その回答として少なからぬ学生が、「愛」「かけがえのなさ」という問題に直面し、それについて熱心な議論を積み重ね、学生相互の多様な声が、多様な回答として相互に刺激を与えたと考えている。

IV 講義の総括

学生からの声にもあったように、①講義と話し合いのバランスをどうするか、②議論の質の高まり、深化を学生が実感できるように適切で明確な論点整理と問題の明確化をどう図るか、といったことが今後の課題だと考えている。

個別/小集団/全体という講義の展開においてこの全体の次元でどう論点を整理し、より質の高い問いを創造し次のサイクルにつなげるか。全体において共有すべき問いをいかに取り出してくるか。教師が暴力的に設定するのでは、教師と学生、学生相互、学生と教材との創造的協働作業として問題の創造していく手法を探ることが、「学びの共同体」の生成には不可欠だと考える。このような課題意識を皆さんと共有できればと思う。